

(様式)

平成 29 年度 現地技術実証展示ほ 成果情報

大豆「里のほほえみ」の良質安定栽培の確立

要約

準狭畦栽培(47cm)による無中耕・無培土栽培により、夏場の労力軽減と収穫時の作業効率化が図られるとともに、通常畦間(65cm)の中耕・培土栽培と同等の収量が確保される。

○ 展示のねらい

準狭畦栽培で中耕・培土を省略することにより、コストダウンが図られるとともに、労力軽減が可能となり、作付面積の維持・拡大が期待される。

展示内容

試験区	基肥資材	施肥量 (kg/10a)	播種様式	畦間×株間 (cm)
供試区	大豆ひとふりくん	50	準狭畦	47×20
慣行区	大豆ひとふりくん	40	畝立同時播種	65×15

○ 主な成果

- ・準狭畦栽培においても、慣行と同等の収量性が確保された。慣行畦間に比べ早期に畦間が塞がれるため、収穫時に問題となる大型雑草の発生は見られなかった。
- ・準狭畦無中耕無培土のため、主茎長がやや伸びやすいことと、地耐力が弱いため倒伏には注意が必要である。

表1 成熟期調査(抜き株調査)

	主茎長 (cm)	分枝数 (本/株)	主茎節数 (節)	莢数 (莢/株)	最下着莢高 (cm)	倒伏程度	成熟期 (月・日)
供試区	54.8	4.6	12.3	63.0	9.2	0.5	11.12
慣行区	52.6	5.0	12.5	75.1	9.2	0.0	11.10

表2 収量調査(坪刈り調査)

	子実重 (kg/10a)	収量比	百粒重 (g)	大粒比率 (%)	検査等級
供試区	340.2	105	46.7	84.7	2等
慣行区	321.6	—	45.0	80.9	2等

※収量及び百粒重・等級は7.9mm以上の値

(写真：上段供試区、下段慣行区、中耕培土期)



○ 今後の方向性

準狭畦栽培については、夏作業の省力化と収穫作業の効率化の観点から導入のメリットがあり、面積の維持拡大を図る上では普及が期待される技術である。

実施機関：上都賀農業振興事務所経営普及部 実施場所：日光市

問合せ先：栃木県農政部経営技術課技術指導班 TEL 028-623-2322 FAX 028-623-2315